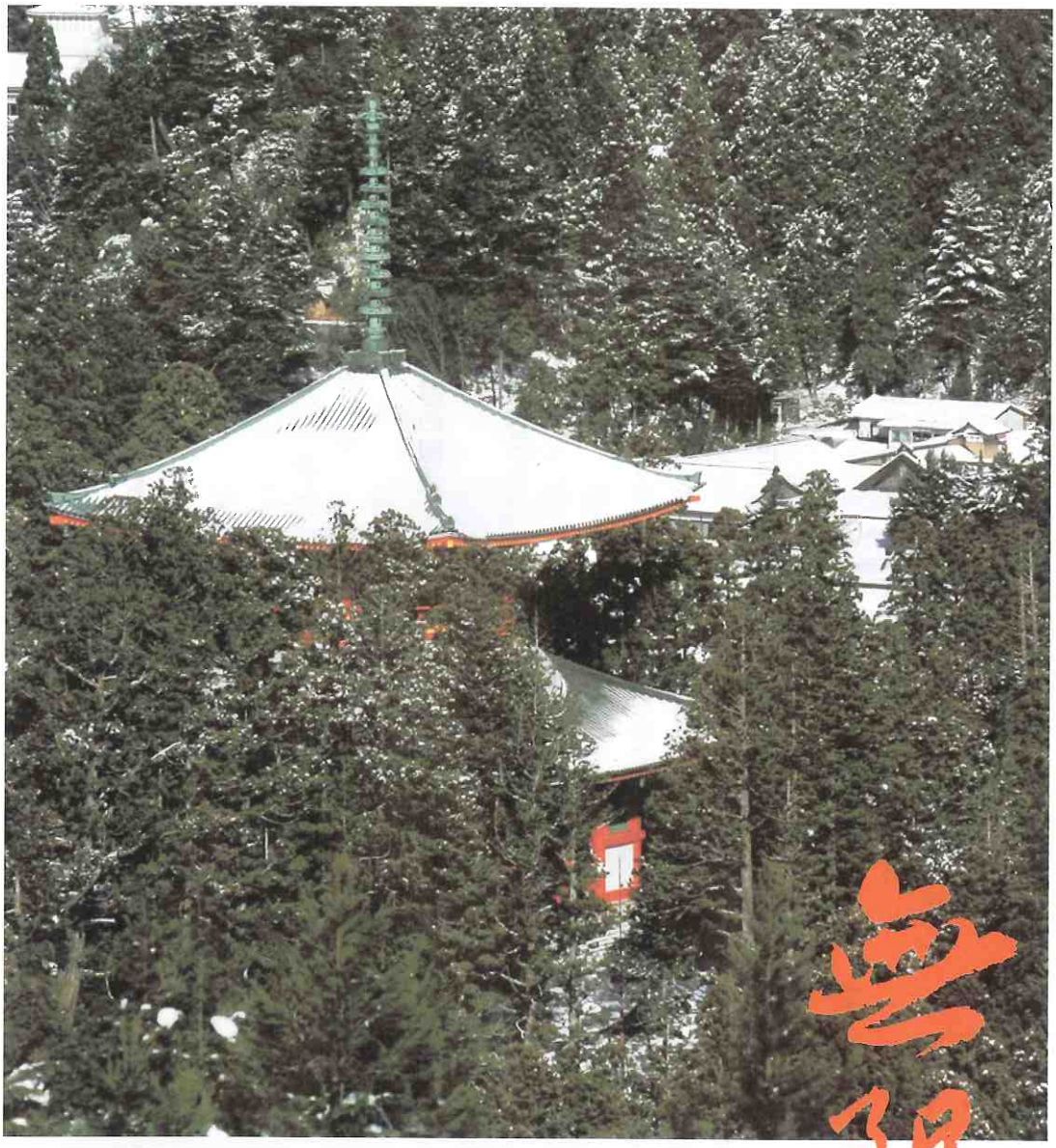
霊宝館だより

霊宝館だより　第78号
平成18年2月10日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山三〇六
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029



雪を戴く大塔

無限春

2006年霊宝館予定

企画展「信仰世界の鳥獣たち
―仏教美術にみる動物表現―」
4月23日（日）～7月9日（日）

第27回大宝蔵展「高野山の名宝」
7月16日（日）～9月18日（月）

企画展「寺院の漆工芸術」
9月23日（土）～12月10日（日）

平常展

「密教の美術」
平成18年1月5日(木)～

年頭雑感

快適で開かれた文化財の殿堂を目指し

高野山霊宝館長　細川　康裕

平成十八年の年頭にあたり、謹んで新年のお慶びを申し上げます。

□□□

霊宝館の創立と文化財の保護

弘仁七年（八一六）、高祖弘法大師が真言密教の根本道場として、高野山を御開創なされてより、千二百年記念の年まで、あと十年に迫りました。総本山金剛峯寺では昨年、その御開創記念法会の準備事務局を開設し、いよいよ本格的な準備体制が始動いたしました。

長い歴史の中で、当山では堂塔伽藍をはじめ実に膨大な、かけがえのない文化財を、度重なる火災によって焼失し、その都度、再建を繰り返すという苦難に耐えて参りました。この教訓から総本山金剛峯寺をはじめ、山内塔頭寺院が所有する文化財を、安全な方法で共同管理して護る以外に道がないことに気づいて、大正十年（一九二一）に霊宝館が建設されました。本年はその時から八十五年を数えております。

一方、昭和三十二年十月には、財団法人高野山文化財保存会が設立され、所有の文化財の保存並びに維持管理と活用を図り、併せて文化財を一般公衆に公開することにより、国民の文化的向上に資することを目的とした活動を開始することとなりました。文化財保存会の事務所が置かれている霊宝館は、その活動の一環として運営されており、従って高野山文化財保存会が関与する地域的範囲は、高野山内全域に拡がっております。山内の文化財所在地域を重点として敷設されているところの、防災管の総延長距離は、実に八キロメートルにも達しており、大事に際しその消防の活動に備えております。貴重な文化財を灰燼に帰するという苦い経験を繰り返して来たことの教訓が、ここにしっかりと生かされているのです。

□□□

霊宝館だより

さて、本誌「霊宝館だより」は、昭和五十七年七月に創刊第一号が発刊されて以来、今回にて第七十八号を数えることとなりましたが、読者の皆様から、いつも「発刊の時を楽しみにしている」旨のお便りを戴いた時には、係員一同感激いたしております。今後とも充実した紙面編集に邁進する所存であります。

□□□

霊宝館の収蔵庫

宇治の平等院の鳳凰堂様式により、大正時代の技術の粋を集めて建設された本館（旧館）の紫雲殿や放光閣と、その周囲の優雅な景観は、当山の風土に見事に調和しており、佛都の至宝を蔵するにふさわしい威厳に充ちているのですが、八十五年の歳月による激しい老朽化の波に洗われて、日々に腐食が進んでおり、指定文化財を収蔵することの観点からすれば、既に限界を超えていながらも、なお、開館当初の美観を保って、凛とした佇まいを見せている姿には、涙ぐましい悲壮感が漂っております。

他面、新しい時代に対応するための建造物は、順次建設されており、昭和三十九年には、保管庫としての「大宝蔵」。昭和五十九年には、出陳展示の機能を有する「新収蔵庫」。さらに、国宝、重要文化財専用の保管庫としての「平成の大宝蔵」が建設されるに及んで、名実共に国内有数の文化財の宝庫としての体裁を整えるにいたりました。

□□□

霊宝館設備と展示会の充実

一昨年（平成十六年）七月、高野山の世界遺産登録を契機として、世界各地からの観光客の受け入れ体制の整備が急務とされている中、当館としても来館者に対するサービスの

ための屋内設備の増設及び改修、並びに展示館の内部美装改修等の実施、屋外については、雨水処理溝の増改設等の環境整備を実施して面目の一新を計り、当館を訪れる人々から「より快適で、より開かれた文化財の殿堂」という評価を得るために、職員一丸となって精進いたしております。

本年も恒例の、夏の「大宝蔵展」、春秋の「企画展」等には、出陳品目の厳選は勿論、展示方法にもサービス向上の一環としての工夫を施す方針でありますので御期待下さい。

本年の対外活動としては、開館以来初めての北海道展が二カ所に亘って開催される運びとなりました。本年（平成十八年）九月九日（土）～十月二十二日（日）には旭川展（於、北海道立旭川美術館）、明年（平成十九年）四月二十四日（火）～六月三日（日）には札幌展（於、北海道立近代美術館）の予定で実施されますが「お大師さまの北の大地への御巡錫」が実現するという吉報に接した現地の皆々様からは、万感の思いに胸を膨らませておられる様子が伝えられております。

お大師さまの弘仁の発願が、この北の大地に蘇り、諸天善神の加護厚く、この大事の発展的成功と、無魔成就を確信いたしながら年頭にあたり、雑感を述べて御挨拶といたします。

末筆ながら、皆々様の御多幸をお祈りいたします。　合掌

収蔵品の紹介 52

重文

南保又二郎（なんぼまたじろう）納骨遺品（のうこついひん）のうち 金銅宝篋印塔（こんどうほうきょういんとう）

一基　総高26・8cm

鎌倉時代

金銅宝篋印塔

宝篋印塔とは、元々宝篋印陀羅尼（梵語の呪文）を納める小塔でしたが、後に供養塔・墓碑塔として作られるようになったものです。

本品は大正十二年（一九二三）に御廟北西から鋳銅阿弥陀三尊像（奈良時代）と共に出土しました。宝篋印塔自体について見ますと、四面にある円相内には金剛界四仏の種子（梵字）が刻まれ、塔の先端が少し欠損してはいますが保存状態は良いといえます。基壇には弘安十年（一二八七）六月二十二日の在銘があり、また南保又二郎入道の遺骨を納めていたことがわかります。南保又二郎がどのような人物かは不明ですが、弘法大師信仰のもと、全国から貴賤・宗派を問わず遺骨や髪・爪などを埋納する人々が後を絶たなかったようで、古い例では嘉承三年（一一〇八）に堀川院の御髪を御廟前に埋めたと「高野春秋」などにみられることから比較的早い時期での納骨であると思われます。

このように、大師のそばに安住の地を求める人々により、御廟を中心とした周辺地区にさまざまなものが埋納され、現在の奥の院が形成されてゆき、「天下の総菩提所」の名を冠する一大霊場となるに至ったと想像されます。　（F）

銘文

大師御入定奥院埋土中安置高野山八葉峰上

南保又二郎入道遺骨也弘安十年六月二十二日卒

連載

高野山の名鐘

其の1　大塔の鐘

霊宝館副館長　井筒　信隆

およそ、一二〇〇年の歴史を歩んできた高野山には、膨大な歴史遺産が伝わっているが、比較的紹介が行われることなく見過ごされがちなものに梵鐘がある。梵鐘は古来から時を知らせ、また寺院行事に、また除夜の鐘に撞かれるなど、深山幽谷の静寂な高野山の生活には欠かせないものであった。ゆえに、多くの梵鐘が高野山に現存するが、あまり注目を集めたことはなかった。

昭和三十八年に、高野山に存在する梵鐘の調査が坪井良平氏によって行われ、『高野山の梵鐘』（昭和三十八年十一月刊）として報告書が刊行されたが、発行部数が極限られたものであったことから、あまり世に注目を集めることがなかったものであるが、高野山の梵鐘の実態を明らかにする貴重な報告書であるので、その内容をかいつまんで紹介をしていきたいと思う。

「高野四郎」の俗称で知られる梵鐘

日本の巨鐘の一つとして有名な梵鐘が伽藍境内に伝わっている。その梵鐘は伽藍大塔前の鐘楼堂に存在し「高野四郎」の俗称がある。日本の梵鐘の中で四番目を想像させる俗称がなぜつけられたか経緯が明瞭でなく、また、この梵鐘の上位にあたる太郎、二郎、三郎と俗称されたであろう鐘は、どのお寺の鐘を指すのか明らかでない点から、この俗称の命名に坪井良平氏は疑問を呈されている。

坪井氏の説によると、梵鐘の俗称は、本来、釣り鐘の口径の大きさによって名付けられた愛称と考えられるとされ、天平勝宝三年（七五一）に鋳造された東大寺の九尺弱の巨鐘を第一位のものとして「南都の太郎」と呼び、高野山の伽藍大塔前の七尺の梵鐘を「高野の二郎」とされ、永暦元年（一一六〇）在銘の吉野廃世尊寺の四尺鐘を「吉野三郎」と本来は伝承されてきたとする説を紹介されている。

「高野四郎」の俗称についてはともかくとして、伽藍境内に所在する「大塔の鐘」の起源は、弘法大師空海によって七尺の銅鐘の鋳造が企てられて、その勧進の知識文が発せられたことに始まる。実際の鋳造完成は大師の後を継承して高野山の経営にあたった第二世真然僧正代のことと考えられている。

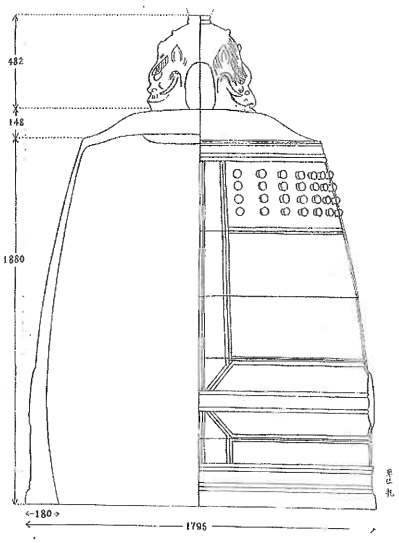
『紀伊続風土記』には、同鐘は

仁平三年（一一五三）と建久七年（一一九六）に改鋳されたことを伝え、さらに永正十八年（一五二一）の大火で鐘が溶けた事から、天文十六年（一五四七）八月に改鋳されたと伝える。しかし、『続風土記』が改鋳を伝える平安時代末期から鎌倉時代にかけて、「大塔の鐘」が焼失するような伽藍火災の記録がなく、また『続風土記』が建久七年の改鋳を示す史料としてあげた「教相興記」の記事は、『高野春秋』第七の建久七年秋九月二十八日に伝える前検校覚善の住房であった引摂院の鐘と錯誤して記されたものと考えられると坪井氏は断じ、むしろ、その姿は古く、永正十八年の伽藍火災で三分の一を溶解したもののその大半が残ったことから、天文十六年（一五四七）の改鋳にあたっても、大師が勧進し鋳造された梵鐘という由緒から、もとの姿や大きさなどを忠実に再現して鋳直されていると考えられるものであるとし、その姿は、平安時代初期の鋳造時の手法を良く留めていると評価された。

天文十六年の改鋳は、奥の院護摩堂の木食長弘が願主になり行われたものであることが、同鐘の池の間や笠型の上部の陰刻銘文から判明する。願主となった護摩堂の長弘なる勧進聖については、陰刻銘によると大和十市郡の生まれで六十六歳である。金剛峯寺の寺命を受けて六月二十八日に鋳造を行ったが失敗し、再び八月二十五日に鋳造作業を行い成就して再興することが出来た旨を伝えている。

巨鐘を鋳成することは古来からかなり困難な事であったようで、東大寺の大鐘も天平勝宝三年十二月の初鋳では成功せず、翌四月閏三月七日に二度目の鋳造によって成功した旨を伝える記録がみられる。また、「大塔の鐘」は天文十六年の改鋳後、江戸時代の天保十四年（一八四三）の伽藍火災によって、梵鐘上部の竜頭部と釣り金具が破損したため弘化二年（一八四五）に再興を行ったことが釣り金具の上部の陰刻銘により知られる。

「大塔の鐘」の音色の素晴らしさについては、除夜の鐘のテレビ報道などで良く知られているが、坪井氏の説によると、『紀伊続風土記』に「諸堂建立記」を引き仁平三年（一一五三）金堂鋳鐘員数のこととして、銅五千九百八十一斤十一両一分、銀千九百六十一両二分云々とある記録は、大塔の鐘の初鋳時の鋳造に要した所要量ではなかったかとする興味深い説が提示されている。



特別陳列
高野山古絵図と地宝
～四月十六日まで

昭和四十年の高野山開創千百五十年記念大法会の記念事業として、奥之院御廟の周辺整備と灯籠堂の新築工事が昭和三十七年から行われました。その際に、御廟や灯籠堂周辺から銅製仏像・鏡・古銭・納骨器・灯明皿・石仏・石塔など多彩な埋納品が出土発見されました。なかでも十二世紀初頭に埋納された比丘尼法薬埋納経塚遺物が発見されたことは、当時としても一大センセーショナルな出来事でした。

今回の特別陳列では、膨大な出土品の中から比丘尼法薬関係を中心として、昭和三十七年の発見以前に出土した七世紀後半の金銅菩薩像や金銅光背、また平安時代後期の金銅基台など、特に優れた埋納遺品を出品致しております。

出陳品

高野山古絵図　寛政五年本　金剛峯寺
高野山絵図　万治元年本　金剛峯寺
高野山参詣図　江戸時代　西南院

国宝

又続宝簡集巻第六一　奥之院絵図

重要文化財

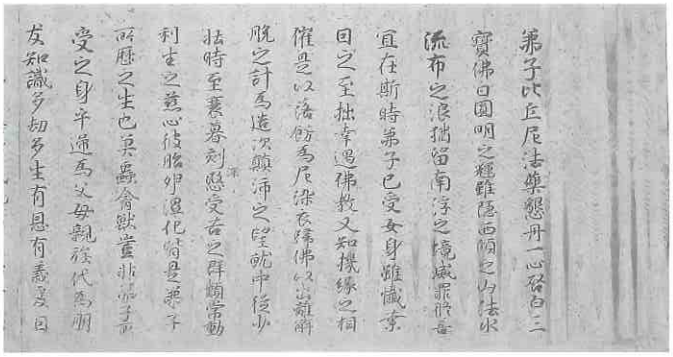
比丘尼法薬埋納遺品関係
陶製外容器、鋳銅経筒
漆塗木製容器、願文
作善供養目録、妙法蓮華経巻第一
無量義経、般若心経・阿弥陀経
経帙、経軸残片
両界種子曼荼羅、法華種子曼荼羅

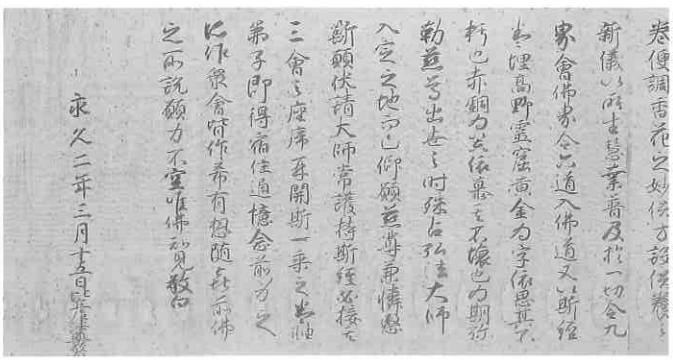
南保又次郎納骨遺品
阿弥陀三尊像、宝篋印塔（収蔵品紹介参照）
御廟の周辺出土遺品
白磁四耳壺、灰釉四耳壺
青白磁竜首水注、水辺菊花飛鳥鏡
灯籠堂の周辺出土遺品
金銅菩薩像、金銅光背
金銅板製基台

陶製外容器

鋳銅経筒

漆塗木製容器


比丘尼法薬供養願文（巻頭）


比丘尼法薬供養願文（巻末）

新収蔵品の紹介

重文 木造十一面観音立像　宝亀院

像高57・7cm　平安時代中期
平成17年10月28日収蔵

木造十一面観音立像は、寺伝では、醍醐天皇の延喜二十一年（九二一）、観賢僧正が納衣を奉持して登山した時、宮中二間観音像を模刻した本像を宝亀院に安置したのにはじまるといいます。この寺伝からみれば、念持仏的なこの観音は、二間観音を模刻して、その時にもたらされたと考えられるものです。頭より蓮肉に至るまでを、ヒノキの一木で作り出し、様式的にも平安前期特有の檀像彫刻であり、翻波式衣文も明瞭に刻まれていますが彫りの大きさの割に、全体にわたってのきびしさに乏しく、特に顔容においてその感が深くなっています。おそらく制作年代は平安中期、十世紀の彫刻と考えられ、寺伝の解釈いかんでは、弘法大師諡号に関連した造像とみることができます。仏面と背後の大笑面を除いて小面はほとんど後補で、反花蓮座・光背も鎌倉期以降のものと考えられます。

時事

【重文・十一面観音立像収蔵】

平成十七年十月二十八日、宝亀院蔵重文・十一面観音立像収蔵が霊宝館に収蔵されました。詳細は前頁をご参照ください。

【展示室改修工事完了】

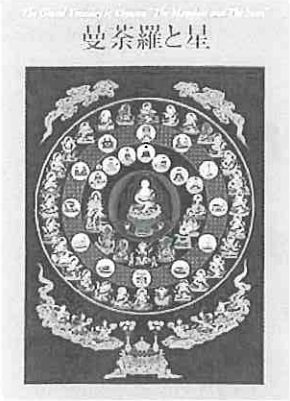
長澤前館長のご厚意、ご支援のもと、展示室の改修工事が昨年十二月に行われました。改装後の展示室は、新館第二室、紫雲殿ともに壁面が新たに張り替えられ、明るさが増したことに加え、展示室独特の雰囲気がより一層強調され、展示品一点一点の存在感や色彩などが、引き立つようになりました。

【高野山も大雪に見まわれる】

例年ならば初雪で、積雪といったケースはないところですが、今季は、一〇cm、二〇cmと積もり、霊宝館でも水道管が破裂するといった被害がありましたが、幸い大事にはいたりませんでした。

展覧会回顧

【曼荼羅と星】 平成三年開催



平成十五年　再販　¥2000

主な出陳品

・両界曼荼羅図（血曼荼羅）
・板彫両界曼荼羅
・八字文殊曼荼羅図
・図像抄所収星供曼荼羅図
・星供曼荼羅図など

展覧会内容

「曼荼羅と星」をテーマに、星々が信仰の対象となるに至った経緯や、密教にとりいれられたのち、両界曼荼羅の一部としてではなく、神格化された星々を中心とした曼荼羅がつくられ、その信仰は「星供」にみられるように現在でも連綿と続いているといった密教世界のあまり知られていない一面を提示することを目的として開催された。開催時、若い世代の方々に特に好評であったのが印象的である。

図録内容

曼荼羅と星の事象との深いかかわりに注目してその背景にある宇宙天体の信仰も伴わせて会得して頂こうという意図にもとづいたものである。「星と文化と密教と」と題して難解になりやすい星と密教の関わりを平易に解説している。

初版後、十五年近くを経った現在でも再販を続けるベストセラーのひとつである。

友の会のご案内

高野山霊宝館友の会では新規会員を募集しております。

会員構成と年会費（次年度より）

A、一般会員（個人）……三千円
B、賛助会員（法人）……三万円

会員の特典

A、一般会員（個人）

①平常展・特別展（大宝蔵展）、特別陳列等を御本人と同伴者一名様まで無料で鑑賞することができます。
②特別展の図録を一部進呈いたします。また、関連展示会の招待券をお送りすることもございます。
③季刊誌「霊宝館だより」をお届けします。
④特別展の期間中、学芸員による列品解説をお聞きいただけます。（※日時等は、霊宝館だよりでお知らせします。）

B、賛助会員（法人）

一般会員の特典に加え、同伴者は十名様まで、展示会の招待券と特別展開催における図録を十部お送り致します。

お申し込みは

まずお電話でお問い合わせ頂くか、霊宝館で直接お申し込みください。入会手続きが完了しますとお手元に会員証をお届けします。（なお、会員証の有効期限は登録年度の一年間です。）

年度末に継続のご案内をお送りします。

よもやま話 Vol.7

高野山の索道

物資運搬用ロープウェー

現在のように、高野山までの電車や道路が普通に通じていますと、参拝や生活をする上での不便さはほとんど無いように思います。しかし、それ以前のこととともなると、生活物資や資材はどのようにして運び上げていたのかなど、折に触れ考えてみることがあります。ところが、現在の環境から昔の状況を想像しても、それは、私たちの思考をはるかに超えているようにも思えます。なかでも奥之院に並ぶ巨大な石塔石材を運び上げる作業や、近代では人が人をカゴに乗せて麓からの長い坂道を山上まで登りつめるのですから、まったく驚くばかりです。

霊宝館は大正十年（一九二一）に開館しました。当時、山上までの道路といえば牛や馬で物資を運ぶ程度の道でしかありませんでした。こうした時期に霊宝館が建設されたのですが、この頃から建物の基礎部にコンクリートが使用されはじめています。そのためセメント・砂利・鉄筋など大量の建築資材を麓から運び上げなければなりませんでした。これを可能にしたのは、実は「索道」の存在があったからなのです。

①椎出（九度山町）の旅館「四方館」前（大正4年頃）
当時の椎出には旅館が10数軒、茶店などが50軒ほどありました。旅館前には山カゴを担ぐ屈強な脚の男性が写っています。山カゴの最盛期には200梃ほどが椎出から山上までを往来したといわれ、大正4年時の片道運賃は1円75銭でした。

②物資の運搬
索道が整備される以前、物資は牛や馬で運び上げられていました。麓の街道筋では季節の花や野菜を軒先に出しておくと、牛方などは必ず積んで登り、弘法大師にお供えしたそうで、これを「雑事登（ぞうじのぼり）」といいました。

我が国最初の営業索道

明治も終わりの頃になると近代化の波は高野山周辺にも押し寄せはじめます。

明治四十五年（一九一二）六月、麓の椎出（現 九度山町）から山上大門地区に至る架空索道が高野索道会社によって開業され、以後「高野索道」と呼ばれました。索道とはロープウェーやスキー場のリフトを想像すると分かりやすいかと思います。ワイヤーにゴンドラ（搬器）を引っかけて物資や資材を運搬するものです。現在でもご年配の方ですと、索道に手荷物を預けて徒歩による高野参詣登山されたことを記憶しておられる方もおられるかと思います。

高野索道自体は、開業の前年の六月には林業索道として既に完成していたらしく、その後、許可を待って貨物運送事業索道となったようです。したがって事実上の開業を明治四十四年とすると、営業索道としては我が国で最初であるともいわれ、また長く営業が続けられたことでもその存在を知らし

③高野索道
ゴンドラに荷物や物資を満載して椎出から山上までの6.4㎞間を1時間半で運搬しました。中には気丈な女性もいて、ゴンドラに乗り込んで高野山へと帰った人もいたようです。

めていました。

実は、高野山の索道はこの一本だけではなく、大正時代の初め頃になって、山内愛宕谷地区から南東の奈良県野迫川村へと向けて線路長六・六キロメートルの「十津川索道」と呼ばれた路線も延びていました。しかし、運営期間が短かったため実際に記憶しておられる方は随分と少ないようです。

また、人が乗る旅客索道というものも高野登山索道㈱によって計画されました。極楽橋から女人堂に向けての線路長一七一五メートル区間の架設工事が昭和四年（一九二九）に開始され、その間に高野口から極楽橋間の架設許可も取得していました。現在も女人堂裏山にはその遺構がありますが、当時は乗降口が女人堂では山内に近すぎるとの反対意見が出されたり、同時期に鋼索鉄道（ケーブルカー）もできるといったことも重なって、資金問題と技術不足とを理由に未完成におわっています。

④高野索道　弁天岳
ゴンドラは大門の北方弁天岳の頂上をかすめて通過していました。そのため、ここからこっそりゴンドラに乗り込む者もいて、思わぬ事故に遭った人がいたことも語り継がれています。

索道で運ばれたもの

高野山上での生活を支えるには、なんといっても食料品が欠かせませんが、山上には田畑がありませんので、すべて麓より運び上げるより方法がありません。索道が創業される以前は、主に人力であったり牛や馬が荷物を運び上げていました。近世にはこの牛・馬道が、現、橋本市からの最短距離として浦神谷から不動坂、高野山へと整備されていたのです。

こうした中、前時代より続いていた高野山名物、高野豆腐（凍豆腐）の製造は、索道事業を推進させるのに重要な位置づけにもなっていたものと思われます。明治期の記録（秀衡経蔵文書）によると、山内だけでも半年間で八〇～九〇万個の高野豆腐を製造出荷していたことが記されています。原料である大豆を山上や周辺地まで運び、そうして製造された高野豆腐を下ろすのに索道が大いに活躍しました。

また大正から昭和になると近隣山村で造られた栗木のシャクシや割り箸、炭、木材などが運び下ろされていました。さらに霊宝館の建設資材を始め、昭和に入っての金堂や根本大塔の建設にも、その運送力を大いに発揮したことはいうまでもありません。

ちなみに大正八年（一九一九）時における米一石の索道運賃は七十銭でした。

⑤高野索道と木馬道
山の中腹を斜めに下る木材運搬用の木馬道とその向こうには索道が通っています。写真の場所は椎出から神谷へ至る長坂街道付近かと思われます。

⑥初代大阪通天閣とルナパークロープウェー
高野索道を建設したドイツ人カタネオ技師によって、明治45年7月に完成しました。通天閣のタワー下からルナパークまでの約100mの区間を旅客索道として運行していました。

高野索道の仕様

高野索道は、我が国最初の複線自動循環式の索道で、総延長距離六・四三一キロメートルを鉄柱四十三基で支え、建設材料のすべてをセレッティ・タンファーニ社より最新式を取り寄せ、それを、ドイツ人技師であるカタネオの指導によって組み立てたといわれています。タンファーニ社は一八九〇年にイタリアで創業した会社で、主に架空索道や旅客索道を製造販売していました。一方カタネオは、大阪天王寺の旧通天閣の建設技師でもあり、新世界ルナパーク・ロープウェー（旅客用）を明治四十五年七月に完成開業させていることでも知られています。

⑦高野索道 椎出（九度山町）
索道の起点は椎出にありました。昭和35年に高野山道路（R480）が開通したことで索道は廃止となりました。

高野索道のゴンドラ一器の積載量は一五〇キログラムで、片道一時間二十分、一日最大二十トンの物資が輸送されたといわれています。但し、当初の動力は三〇馬力のガスエンジンだったようで片道約二時間を要し、その後、電動機に変更されてから運送時間が短縮したようです。

⑧高野索道　椎出停車場
明治45年6月23日、ゴンドラに乗り込んでの開業式記念写真です。

高野索道の終焉

昭和十五年（一九四〇）七月、高野索道会社は南海電気鉄道㈱と合併しつつ営業も続けられました。昭和二十七～二十八年（一九五二～五三）の豪雨（紀州大水害）では、電車をはじめ登山道路のすべてが通行不能になった折り、この索道だけは稼働したので、救援物資や食料、資材などを運ぶのに相当活躍したことは各種の記録に取り上げられています。

霊宝館の第二収蔵庫（大宝蔵）の建設工事は、昭和三十二年（一九五七）から始まりました。総鉄筋コンクリート造りでしたので、この時も霊宝館創建時以上に大量の資材が索道で運び上げられました。高野索道は昭和三十五年高野山道路の開通と交わりつつ廃止されましたので、まさに索道の歴史は高野山の重要な近代建築の建設とともに存在したようで、霊宝館の建物を前にしても感慨深いものがあります。（M）

⑨高野索道株式会社の本社
こうした写真は、当時絵ハガキとして出回ったようです。

⑩高野索道　大門
昭和35年より始められた霊宝館大宝蔵の建設により多くの資材が索道で運び上げられました。写真は大宝蔵建設資材の一部です。

※写真番号
①は九度山町喜多萬里氏
②⑤⑦は国書刊行会（株）
⑧⑨は九度山町松山哲子氏
の各位より掲載承諾を受けました。また写真①⑧⑨の提供に関しましては九度山町史編纂室藤田富和氏にご尽力賜りました。記して感謝申し上げます。

霊宝館販売品のご案内

霊宝館では現在、100種類ほどの物品を販売いたしております。もちろんそれらのすべてが霊宝館オリジナル商品で、他では手に入らないものばかりです。

前回に続き物品のご紹介をさせていただきます。また、ホームページからもご注文いただけます。

■額絵　各¥400
B4サイズ　カラー　全6種類

■硯屏風（すずりびょうぶ）　阿弥陀聖衆来迎図　¥1200
国宝・阿弥陀聖衆来迎図を屏風仕立てにしたもので、自立します。

▲額絵　金剛界曼荼羅

▲額絵　阿弥陀聖衆来迎図

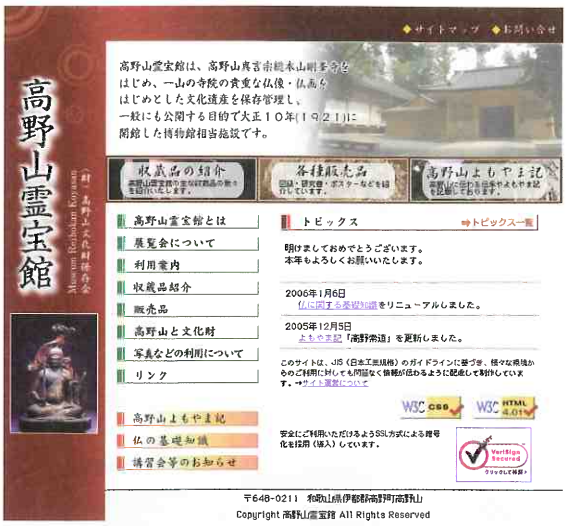
▲額絵　胎蔵界曼荼羅

▲額絵
地蔵菩薩像

▲額絵
大日如来

▲額絵
尊勝曼荼羅図

▲硯屏風　阿弥陀聖衆来迎図



高野山の歴史や文化にふれよう！

高野山 霊宝館 ホームページ

http://www.reihokan.or.jp へアクセス

この度、ホームページを内容だけでなく、さまざまな方が容易にアクセスできるようにリニューアル致しました。通信販売のページも新たに設け、ご好評いただいております。この機会に是非一度ご覧下さいませ。

利用案内

開館時間　8時30分～16時30分
（入館は16時まで）
休館日　年末年始のみ
拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
団体割引　大人20名以上
団体割引　高・大学生200円
団体割引　小・中学生120円
専用駐車場あり（無料）

紫雲放光

新年あけましておめでとうございます。

正月休み、ここぞとばかりに外へ飛び出した方も、家でゆっくりと過ごされた方もいらっしゃったようです。私は家で寝正月を決め込みましたが、よく考えてみると戌年。寝正月はマズかったかなと少々後悔気味です。とはいえ新年は始まったばかり。心身ともに充実したところで、本年を素晴らしい年にするために駆け出していく所存です。

本年も霊宝館を何とぞよろしくお願い申し上げます。（I）

昨年12月からの寒波にともなう雪害（降雪、雪崩）等の被害を受けられた皆さまに心からのお見舞い申し上げます。

高野山霊宝館